

サントリー音楽財団推薦コンサート

指揮：パオロ・フェツラーラ 関西フィルハーモニー管弦楽団



大阪アーティスト協会
20周年追加公演

20世紀・21世紀 近現代協奏曲の変遷

2006
12/19
7:00pm (火)

6:45pmより
作曲者 吉田美香、近藤浩平による
プレトークを開催

吉田 美香 Mika Yoshida

しの笛とオーケストラのための二章〔委嘱初演〕

「序曲」Ceremony

「一章」BASIS ～心の底に眠るものたち～

「二章」ORIGIN ～温懷を求めて～

篠笛は、遠い昔から日本人の心を奏でて来た楽器です。喜び躍る心を奏でる、祭り囃子のピーヒャララ、母の面影を慕って奏でる義経の笛の音。素敵な楽器です！また、篠笛は通常のオーケストラで使用される西洋楽器とは、音律が違います。だからオーケストラの音には溶け込みません。これも、また、素敵です！そんな篠笛とオーケストラのコントラストに惹かれて、2つの小品(二章)を創りました。そして、序章を添えました。篠笛奏者でフルーティストの大庭氏ならではのクロスオーバー奏法と、マエストロ・フェッラーラの鋭い感性、そして、関西フィルハーモニー管弦楽団の誠実で温かい響きに抱かれて、今宵、初演されます。

「序章」Ceremony

～That calms down soul～ (鎮魂の儀)

篠笛の独奏です。場を浄め、心を鎮める笛の音の不思議・・・大庭さん、がんばれ！・・・

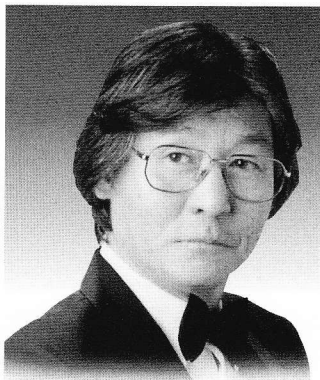
「一章」BASIS (心の底に眠るものたち)

誰もが持っている、「心の奥底に封印して忘れているもの(篠笛が演じます)」を、オーケストラの重厚で温かい響きが、目覚めさせ、激情させ、安堵へと導きます。この章では、異質の個性を持つ篠笛とオーケストラが、共に昂揚し、共に鎮静する事で、同方向に流れる1つのエネルギーになる姿を試みました。

「二章」ORIGIN (温懷を求めて)

「耳を澄ませば聴こえて来る大自然の妙音は、心を元気にしてくれます。帰るべき処を教えてください。耳を澄ましましょう！」そんなメッセージを込めた二章は、明快なストーリーを持っています。オーケストラは大自然の妙音を奏で、篠笛は、その妙音に覚醒され変貌して行きます。始まりは、暗く冷たい草葉の陰、螢の儚い明滅に続く虫の声。篠笛は、聞き入るうちに、釣られて真似て口ずさみます。これを機に夜が明け始めます。鳥の囀り、深い樹海、眼前にそびえる滝の雄姿。溪流は豊かな大河となり雄大な海に注ぎます。そして万物に恵みを与える雨となるべく天空へと帰ります。ダイナミックに変幻する大自然と、鮮やかに変貌する篠笛のコントラストは、演じて下さる皆さんの熱意で実現しました。

(吉田 美香)



大庭 浩爾 (しの笛)

Koji Ohba, shinobue

専門であるフルートの傍ら、しの笛に出会う。20年程前、和太鼓団体からの依頼により初めてしの笛奏者として演奏会に出演。以来、困難といわれる和音調のしの笛で音階を吹く技術を独自に習得。現在、大阪シティアカデミー、毎日文化センター、アキノサークル等で講師を務める。

<フルート>大阪音楽大学器楽科卒業。曽根亮一氏に師事。スイスにてマルセル・モイーズ・フルートセミナーを受講。NHKオーディション合格。NHK-FM「タベのリサイタル」、アートムジカ合奏団との協演でFM放送に出演。大阪、京都にて数回リサイタルを開催する他、ヴィエールフィル、テレマン室内管弦楽団等とも協演。90年モーツァルト室内管弦楽団と協演。92、93年松永みどり弦楽四重奏団と協演。95、96、97、98年バオロ・フェッラーラ指揮によるテレマン室内管弦楽団「新春コンサート」に出演。大阪音楽学院講師。現在は室内楽を中心に活躍中。

ピアノ協奏曲 作品84〔委嘱初演〕 *Piano Concerto op.84* (2005年10月～2006年5月)

I. Andante con moto
II. Allegro agitato

III. Adagio con delicatezza
IV. Grave

20世紀において、作曲家達は音楽の世界を拡大することに大きなエネルギーをかけた。現代作品を難しいものにする副作用も大きかったが、このことは様々な文化や価値観を背景とした多様な音楽を作曲する自由をもたらした。21世紀においては、作曲家は日常の演奏レパートリーを供給することを強く意識するべきだ。日々の新しい出し物を供給し、日常の演奏レパートリーを乗っ取っていこうという野心を抱くべきだ。これが本当にラジカルな変化をクラシック音楽にもたらすことになる。

第1楽章

強い推進力と必然性をもって走るピアノ。生命力のある自由な疾走感と、広々とした空間感覚をもったハーモニーの共存。冒頭の本管の和音主題に基づくパッサカリアあるいはシャコンヌ的な発想があり、ブリテンやホルストなどのイギリス近代音楽的な形式感覚が潜んでいる。リズム感には、クラシック音楽的ではない運動感覚がある。20世紀は世界の様々な音楽のリズムが混淆し雑種化した時代。

第2楽章

呪文のような執拗さと集中から始まるが、やがて拡散し、意外な優しさに到達する。後半に、

バロック時代の活発な音楽やヒンデミットの音楽のような、生き生きとした休息の音楽が用意されている。

第3楽章

密やかな妖しさをもった非常に繊細な歌。長崎県の詩人、森永かず子氏の詩による歌曲を書こうとした際に、その響きに触発されてスケッチした素材が、詩に沿った歌曲という形をとらずにこのような音楽になった。

第4楽章

重さをもった前進する音楽が結論をもたらすかのように見えるが、実はそれは、何か辿り着くべき音楽空間を模索するもの。辿り着く音楽空間として幾つかの異なった自作の音楽が引用される。その中には、未発表のオーケストラ歌曲や、森永かず子氏の詩による歌曲や、室内楽曲がある。全4楽章のピアノ協奏曲は、ブラームスの第2番(1881年)が知られているが、リトルフ(1818～1891)の交響的協奏曲第2番(1844年)、交響的協奏曲第4番(1851～1852年)という先例がある。

(近藤 浩平)



福村 麻矢 (ピアノ)

Maya Fukumura, piano

相愛大学音楽学部器楽科卒業。大学卒業と同時に渡欧、ウィーン市立音楽院に入学。1998年にディプロムを得て卒業。1999年からアメリカ、ベイラー大学よりアシスタントフェローシップを受け、伴奏助手の傍ら同大学院に学ぶ。2001年5月修士課程修了。大学在学中、大阪市ユースオーケストラの上海、蘇州公演にソリストとして同行。吹田音楽コンクール入選。ウィーン滞在中は、ウィーン市内、郊外でのリサイタルをはじめ多数の演奏会に出演。1996年コアノイブルク国際ピアノコンクール第3位入賞。01年10月に東京・大阪において帰国記念リサイタルを開催。このリサイタルに対し、平成13年度・大阪文化祭奨励賞受賞。以来、ウルリーケ・ダンホーファー(Vn)、アダルベルト・スコッチ(Vc)の両氏とピアノトリオ、ウィーン・ラズモフスキー四重奏団との共演の他、大塚市交響楽団定期演奏会、ブルガリアのプレーベンフィルハーモニックオーケストラ定期演奏会にピアノソリストとして出演など。これまでに、椋木裕子、辻本澄子、T.クロイツベルガー、K.ジョーダン、W.ヴァッツィンガーの各氏に師事。

ラフマニノフ S.Rahhmaninov

ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 作品18 *Concerto for Piano and Orchestra No.2 c-minor op.18*

- I. Moderato
- II. Adagio sostenuto
- III. Allegro scherzando

ロシアの作曲家、セルゲイ・ラフマニノフ(1873～1943)は生前、ピアニストとしても有名であった。親指から小指までが1オクターブ半以上(約30cm)届いたという巨大な手を駆使して、ピアノの腕前は正に「ヴィルトゥオーソ・ピアニスト」。鍵盤の上を縦横無尽に駆け巡る超絶技巧は人々の耳と目を愉しませた。一方、作曲家としては、ピアノを含んだ作品で「名人芸」を活かしつつも、息の長い詩情に満ちた音楽を書いた。

《ピアノ協奏曲第2番 ハ短調》はラフマニノフが28歳となった1901年春の作品。メランコリックな旋律と技巧的な装飾性の高い部分が、ロシア特有の雄大なダイナミズムに呑み込まれ、渾然一体となって巨大なエネルギーの持続を生み出している。広い音域を縦横無尽に用いた独奏ピアノの確固たる存在感はラフマニノフの真骨頂であり、微妙な陰影を伴ったオーケストラの響きは彼の新境地だ。1897年の《交響曲第1番》初演の失敗以来、そこで受けた精神的打撃がひどく大きかったため、3年間はまったく作曲をすることができなかったラフマニノフだが、睡眠療法が効を奏して作曲への気力を取り戻し、北のイタリアのジェノバで構想が練られた後、完成させたのがこの《ピアノ協奏曲第2番 ハ短調》である。初演は当然ながらラフマニノフのピアノ独奏で行われたが、作品に対しても好意的な批評が多く、聴衆の評判も上々だったようだ。

第1楽章〈モデラート〉は印象的な鐘の音を模した独奏ピアノによる和音の積み重ねで始められる。ロマンティックかつ、がっしりとした骨格を持つ音楽である。

第2楽章〈アダージョ・ソステヌート〉での色彩感が移ろいゆく様は見事で、柔らかに抒情に満ちた響きに満ちている。

第3楽章〈アレグロ・スケルツァンド〉は晴れやかに澄み切った空のように、颯爽たる音楽が奏でられる。うねりを持った高揚感が、押し寄せる波のようなクライマックスを築き上げる。

(小味測 彦之)



笠原 純子 (ピアノ)

Junko Kasahara, piano

4年間学費全免を受け、大阪芸術大学卒業。塚本賞受賞。国際ロータリー財団により渡欧、パリ、エコールノルマル、サンクトペテルブルク国立音楽院、ドイツ国立ザールランド音楽大学大学院・演奏家課程修了。ABC新人コンサートオーディション、ルービンシュタイン国際ピアノコンクール他入賞。ザールブリュッケン音楽祭などドイツ、ロシア、イタリア、フランス、フィンランド各地での音楽祭に度々招待出演する他、ベルリン・フィルメンバーとの室内楽や、ヨーロッパ各国、米国、南米、ロシア、イスラエル日本でのリサイタル、国内オーケストラやサンクトペテルブルク国立アカデミー交響楽団、サンクトペテルブルク・カペラフィルハーモニー、ザグレブフィルハーモニー管弦楽団など、オーケストラとの協演も多く、各国の有力紙にて絶賛を博している。大阪芸術大学、愛知県立芸術大学各講師。

吉田 美香 作曲

Mika Yoshida, Composition

1979年、相愛大学音楽学部器楽学科ピアノ専攻入学後、同大学作曲学科作曲専攻に転科、卒業。同大学研究科修了。在学中、ゲルノーブル夏期音楽大学修了。関西音楽大学協会主催「アンサンブルの夕べ」出演、沖縄復帰10周年記念演奏会で「ピアノ協奏曲」「三線協奏曲」、大阪市音楽団青少年コンサートで「序曲マイン・モナーク」初演。作曲を山田光生、松村貞三、池内友次郎、ミシェル・メルレ各氏に、編曲を兼田敏氏に師事。1986年より10年間、相愛大学音楽学部にて非常勤講師として勤務。読売クラシック新進作曲家シリーズで「音楽随筆・寂光の音色」上演。国体馬術部門、全日本馬術大会のキューア演技の音楽を担当。国際ユーフォニウム・チューバ・シンポジウムで委嘱作品「コラージュ・オブ・ウチナー」初演。ヤマハ吹奏楽団定期演奏会で委嘱作品「シンフォニックバンドのためのPoem～風の中で・・・～」初演。委嘱作品「メゾソプラノと2台のピアノのための～二章～」初演。2002年に、音あそびグループ“アコースティック・セッション”を立ち上げ、保育園、幼稚園、小学校、養護学校、等で、“音あそび”～子供達の耳を育む試み～を実施している。

音あそびグループ“アコースティック・セッション”代表、生涯学習インストラクター、深新会-関西-会員、作曲家集団“PORT”メンバー、兵庫県教育委員会東播磨地域教育推進委員、日本音楽療学会会員、元、相愛大学音楽学部作曲学科非常勤講師。

近藤 浩平 作曲

Kohei Kondo, Composition

1965年生まれ。関西学院大学文学部美学科にて音楽学を学ぶ。国際ピアノデュオコンクール作曲部門入選。山や自然に関わる作品が多い。日本作曲家協議会会員。http://members.aol.com/R5656m/

出版作品：連弾の為の組曲「島」(ピアノ1台4手)／歌曲集「木にかえる」(ソプラノとピアノ)／木管5重奏曲「上海の猫」／「南の小協奏曲」(10人編成アンサンブル)(以上、マザーアース株式会社刊)／歌曲集「うみ山のあいだ」(ソプラノとオーボエ)(日本作曲家協議会刊)／「3つの木の組曲」(ピアノ1台4手)／「海へ向かう風」(ピアノ独奏)(以上、全日本ピアノ指導者協会 ミュッセ刊)／「吹き流し」「山羊のいる風景」(アルトリコーダー2、チェンバロ)／「4つの山小屋の窓」(アルトリコーダーとチェンバロ)(以上、リコーダーJ P刊)／

CD：「森の声」(メゾ・ソプラノ、ヴィオラ、ピアノ) JILA-1537／「3つの木の組曲」(ピアノ連弾) JILA-1538／「3つのパリエーションルート」(クラリネット、ピアノ) JILA-1652／「うみ山のあいだ」(ソプラノ、オーボエ) JILA-1755／連弾のための組曲「島」抜粋 JILA-1758／連弾のための組曲「島」全曲(マザーアース刊の楽譜添付CD)／

その他の主要作品：「旅について」(9人編成アンサンブル)／「白い岩山への行進第2番」(9人編成アンサンブル)／「秩父古生層の旅」(箏とヴィオラ)／「ヴィオラとチェロの為の2重奏曲集」／「島と山の小品」(オーボエ3重奏)／「青と緑の稜線」(ピアノ2台4手)／「海の笛、山の笛」(リコーダー4重奏)／「誘われた土地」(ソプラノ、チェロ)／



パオロ・フェッラーラ

Paolo Ferrara

Conductor

1958年ミラノ生まれ。イタリア・トリノ・ヴェルディ国立音楽院にて作曲法をルッジェーロ・マギーニ、カルロ・ビネッリの各氏に師事。81年最高点で卒業、フランコ・アルファーノ賞受賞。指揮法の才能をカルロ・ゼッキ氏に見出され、同氏の推薦により同音楽院にてカルロ・ダメヴィーノ氏に師事。最高点にて卒業。またアカデミア・ギジアーナにて指揮法のマスターコースをフランコ・フェッラーラ氏に師事。85～89年ヴェルディ国立音楽院にてカルロ・ダメヴィーノ教授の助手を務め、イタリア国内外において主要な演奏会に出演。トリノ市レージョ王立歌劇場オーケストラとの多くの共演により、バロックから近代に至る様々な室内楽の形式及び演奏に精通する他、数多く

の著名な現代作曲家の初演にも取り組み、各国にてラジオ録音、ライブ放送を行う。98年サンレモ「ジーノ・マリヌツィ」若い指揮者のための国際コンクール第3位。89年リーミニ・マラテスティアーナ及びポルトグルアーロ音楽祭でのストラヴィンスキー「兵士の物語」全曲演奏に際し、高い評価を受けCD化される。93年ラクイラ、ローマ、ヴァストにてアブルツェーゼ・シンフォニーオーケストラを指揮。94～98年「新春コンサート」で来日し、関西フィルハーモニー管弦楽団及びテレマン室内管弦楽団を指揮。95年よりブラジル・パレストリーナ音楽院より招かれ、教鞭を取る他、96年OSPA「ブラジル・ポルトアレグレ交響楽団」を客演指揮。その他、ヨーロッパアンサンブル「アンティドグマ・ミュージカ」の常任指揮者としてヘルシンキ、メルボルン、東京、オスロ、アムステルダム、パリなどで活動を展開。98年からはアレクサンドリア国際ギターコンクールのファイナルコンサートの指揮者も務める。00年3月ジェノヴァのカルロ・フェリーチェ歌劇場と契約。アレクサンドリア・クラシックオーケストラとニューイヤーコンサートを行う他、03年シーズンにも度々指揮。03年米国ジョージア大学オーケストラを客演指揮。現在、アレクサンドリア・ヴィヴァルディ音楽院教授として古典から20世紀音楽に至る指揮法と解釈を教えている。

特定非営利活動法人

関西フィルハーモニー管弦楽団

Kansai Philharmonic Orchestra

1970年ヴィエール室内合奏団として発足。後にヴィエール・フィルハーモニックと改称、海外演奏旅行を含め12年間にわたるオーケストラ活動を基盤に、1982年1月関西フィルハーモニー管弦楽団として新発足。1994年より常任指揮者に国際的に活躍するウリ・マイヤーが就任し、平成6年度大阪文化祭賞本賞を受賞した。2003年10月より特定非営利活動法人(NPO法人)として生まれ変わり、関西を代表するオーケストラの一つとして文化・社会への貢献を目指して積極的に活動を続けている。

2000年より新鋭・藤岡幸夫が正指揮者に就任、2001年には、芸術選奨文部科学大臣賞の受賞が記憶に新しい飯守泰次郎が常任指揮者に就任。飯守は、楽団創立30周年記念企画「ベートーヴェン交響曲・協奏曲チクルス」や「ブラームスと国民楽派」、オーケストラを主体にした新しいアプローチによる「ドイツオペラシリーズ」で、古典からロマン派を中心に精神性溢れる質の高い演奏で好評を博し、藤岡は、「Meet the Classic」や地方公演においてクラシック音楽ファンの裾野を広げるとともに、定期演奏会・斬新な企画で注目を博した「パウル・ザッピヤーの遺産」などにおいて古典派から現代作品の初演まで幅広く取り組んでいる。

人間の営みから生まれた音楽…『ヒューマニズム』をテーマに、聴衆の心に感動と勇気を伝えるべく活動を展開するとともに、地域密着を重視。地元練習場での「コミュニティコンサート」などで聴衆との交流を図り、関西出身の若手アーティストも積極的に起用している。活動に明確なビジョンを持ち、常に新たなことに挑戦する個性派オーケストラとしてますます好評を博している。

